

「現地を訪問して想うこと」

1969年 理工学部基礎工学科卒
藤田 和育(ふじた かずやす)

「行動せずして!得るものなし!」

去る11月2日から1泊の立命館大学校友会2013年東日本大震災復興支援事業の「東北応援ツアー」に参加させて頂きました。

本来は少しでも早くあの生々しい津波被害の起きる様子をテレビ中継やニュースでの報道では承知していますが「百聞は一見に如かず」故事ことわざでも有る様に間接的に聞いたり見たりを感度も繰り返すよりは現地を生目の目で見て確かめて臨場感を目に焼き付ける為に参加したのです。

震災後2年半を過ぎておりますが復興とは名ばかりでこのままだと何年先なのか被害者には不安の毎日だと痛感いたしましたのです。

津波で流された陸前高田市や大槌町や釜石や大船渡などなどは今では被災の残骸は一見処理されていますがその後は雑草と池の様な水溜りして元の建物の基礎も隠れてまるで自然の光景と勘違いすることも…

それは時自然界の野鳥や海鳥の格好の楽園の様にすると思われる光景で言葉も出ない生活空間が消え去ろうとしていたのです。

しかし、救われたのは遅い復興事業でありますがクレーンやダンプの力強く動いているのがせめてもの救いでした。

この悲惨で甚大な震災の状況はやはり一見してどんなに大きな津波で有ったのかを被災者と共に共有することだと思った次第です。

私、ひとりの力では何事も出来ませんが「北京の蝶」の如く一匹の蝶が北京を飛立つとその行動に共鳴して二匹が飛立つ様に一人ひとりの共鳴者を呼び起こすことになる…そして被災地での観光などを通して活力とお金の潤いをお手伝い出来るものと思っています。

特に美味しいお米でのお酒や語り部の「伝承園」と被災地でネットワークからの「大槌刺し子」などなど色んな意味での心のお手伝いは出来そうだと思います、今回はお酒2本と「大槌刺し子」のTシャツ3枚めて2万円余り心ばかりのことにして来たのです。

この悲惨な状況を今も心のケアとして支えているボランティア「遠野まごころネット」の見学もさせて頂きましたが、いよいよ今年からボランティア自体の運営補助がなく本当の意味での手弁当での被災された人への心のケア—されている姿に頭の下がる思いでした。

私も今回のツアーで得たことを今後のお仕事での講演の中で一言取り入れて語りかけて行きたいと思っています。

時間を見つけてプチ被災地ツアーして行こうと思っています。